

Title	宮川浩一 平尾光司著 資本交流と国際金融
Sub Title	
Author	原, 豊
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.8 (1965. 8) ,p.791(99)-
JaLC DOI	10.14991/001.19650801-0089
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650801-0089">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650801-0089</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大野信三著

『現代経済学史』

本書は、一八七〇年から一九六〇年にいたるまでの時期における経済学の発展をスケッチした研究である。

たしかに、著者が主張しているように、経済学になんらかの意味で関心をもつ多くの人々に、真に世界各国における経済学研究の現状を理解させるような、包括的でアップ・トゥ・デートな経済学史の概説書となると、残念ながら、皆無に近いといつてもよいし、とくに、日本においてはその企ては全くないと言つた実状である。しかしこのことは、当然の事象であるとも言えよう。その理由は、これまで日本の経済学の急速な発展は、主として欧米先進諸国の経済学の導入・消化にかかりきつていたという事実や、ただ日本の多くの研究者たちが世界の最先端の議論をおしきめるのにもつぱらエネルギーをついやしてきたといふことは別にしても、まだ十分に時間が経過していない現代を歴史的な観点から評価し、位置づけることの困難に根本的にもと

づいているからといえよう。だが、現代についての経済学史が不必要であるのではなく、むしろ今後経済学がどのような動向をとるのかを知るためには、この企てが誰かの手によつてなされなければならないことはいうまでもない。

本書を大きくわけると三つの部分になる。

- 第一編 限界主義学派と新古典学派
- 第二章 一般均衡の経済学
- 第三章 アメリカ的な新古典学派の成立と発展
- 第四章 シュムペーターとスウェーデン学派の貢献
- 第五章 英国における新古典学派の成立と発展
- 第六章 制度主義学派の変化と計測の経済学
- 第七章 社会倫理的な思潮と社会主義の分化
- 第三編 ケインズ経済学と現代における理論的な研究の進歩

九八 (七九〇)

第八章 ケインズといわゆる「近代」経済学

第九章 現代における理論的な研究の進歩 (一)

第十章 現代における理論的な研究の進歩 (二)

第十一章 新しい総合の企て

結論

第一編では、結局的には、現代の経済学的主流となり、その伝統の主要な形成要因となつた限界主義学派と新古典学派に属する諸々の学派について述べられており、第二編は、この経済学的主流の底にある個人主義的・自由主義的な思想に対する制度主義的・社会倫理的・社会主義的ないし普遍主義的な反撃について考察している。第三編は近代経済学、もしくはケインズとケインズ以後のケインズ学派の発展を跡づけているが、著者も述べているように、この編の焦点は、主に最近、多くの経済学者たちが努力を傾注している研究分野、すなわち市場形態もしくは不完全競争理論、景気循環と経済成長をふくむ経済変動理論、経済構造の理論、比較経済制度論、計画経済論、立地理論、ゲーム理論、線型計画

宮川 浩一 著  
平尾 光 司 著

『資本交流と国際金融』

論、巨視的分配論、産業連関分析における研究の進行状況とその成果にあてられている。そして、最後に著者は、現在の経済学の動向にとつてのいちじるしい性格である分化のなかにおいて、総合的な経済学を再建しようとする経済学者たちを高く評価し、その企てのいくつかを紹介している。

本書は、コンパクトな概説書として、現代の経済学の主要な潮流を理解するには、便利なガイドとなるであろう。また、現在、われわれが学んでいる理論が、経済学の潮流において、どのように位置づけられるかを知るのに役立つであろう。しかし、著者自身が述べているように、本書は、あくまでも今後著者がきめ細かに展開する現代経済学史の「マニフェスト」であり、その意味では、フレーム・ワークがあたえられているだけにすぎず、まだ十分に学史的分析がどこまで行っていない。しかし、現代経済学の展望と位置づけについての一応の概念をえておかなければならない入門者にとって、この程度の知識は是非知って欲しい。(千倉書房・A6・一九四頁・四五〇円)

新刊紹介

松浦 保一

自由化の進展にもなつて、わが国でも長期短期の外国資本の流入が増大かつ多様化しつつあるが、実務家は別として、われわれは国際金融や資本交流の実態と機能については案外無知のようである。たとえば、ユーロ・ダラーは何物かは知っていたとしても、それが実際にどういう計算の下に動くかは知らず、アメリカ資本の西進は知っていても、それが具体的にどのような形で行なわれ、西欧の企業にいかなる衝撃を与えているかについては多くを知らない。こうした理由は、一つには金融制度が初学者をうんざりさせるほど煩雑な内容をもっていることによるが、また二つにはそれを理解し易く料理し提供してくれる書物が数少なかったことにもよる。

だが、本書はそういう数少ない書物の一つとして推したいものである。著者達は長期信用銀行におけるこの分野のエキスパートであり、豊富な統計資料を用い、平易かつ具体的な叙述に努めていることも好感がもてる。開

概説

- 第一章 短期資本の国際交流
  - 第二章 長期資本の国際交流
  - 第三章 資本交流の活発化と銀行業務
  - 第四章 わが国をめぐる資本交流
  - 第五章 国際資本交流とわが国金融機関
- 付録——主要文献および資料紹介
- このうち、第二章は、アメリカの長期資本移動、イギリスの長期資本移動、西ドイツの長期資本移動、EEC、OECDにおける動向、資本統合における動向に分かれ、資料と共にくわしく解説されているから非常に参考になる。なお、第四・五章が相対的に短かいさらいがあるが、わが国をめぐる資本交流の増大と相まって、今後補足されてゆくことを期待したい。(銀行研修社刊・B6・二八六頁・六三〇円)

九八 (七九一)

松浦 保一